■第5章　前身銀行の概要

当行の前身である六十九銀行と長岡銀行は、大正11年から昭和9年にかけて、13行に及ぶ諸銀行を合併あるいは買収した。そして、両行合併後も昭和18年12月には長岡貯蓄銀行を合併し、経営規模の拡大を実現していった。

これら被合併銀行における設立の事情は、それぞれ別々であったが、20～30年の歴史を有し、その所在する地域の金融を担当しつつ地場産業・地域産業の開発・発展に貢献していた。そして、これら被合併銀行が築き上げてきた業績を当行は受け継ぎ、地域社会とより密接な結び付きを保ちつつ、地元の一員として深く根をおろし、今日に至っている。

本章においては、これら前身銀行の創立の背景にも焦点をあて、併せて合併の経緯とその間における業況の推移を述べた。

表2　合併銀行一覧　（金額単位：千円）

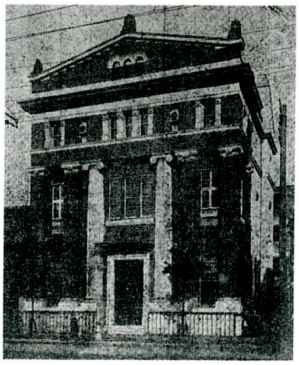
銀行名	合併年月日	本店所在地	設立年月日	資本金	払込資本金	備　考
東京栄銀行	大11. 1. 1	東京市京橋区	明42. 9.12	1,000	750	長岡銀行と合併
見附銀行	11.11. 1	南蒲原郡見附町	14. 2. 6	1,000	550	長岡銀行と合併
越見銀行	12.12. 1	南蒲原郡見附町	31. 5. 7	500	450	六十九銀行と合併
脇野町銀行	昭 2. 4. 1	三島郡脇野町村	28.12. 9	300	200	六十九銀行と合併
六日町銀行	2.10. 1	南魚沼郡六日町	31. 2. 1	500	500	六十九銀行と合併
寺泊銀行	4. 4. 1	三島郡寺泊町	29. 8.31	1,100	875	六十九銀行と合併
(地蔵堂銀行)	(大15. 1.24)	西蒲原郡地蔵堂町	14.10. 6	500	425	寺泊銀行と新立合併
長岡商業銀行	昭 4. 4. 1	長岡市表町	大 7. 2.26	1,200	825	六十九銀行と合併
関原銀行	6.12. 1	三島郡関原村	明31. 9.27	100	100	六十九銀行が買収
今井銀行	7. 1.26	西蒲原郡吉田町	33. 2.24	500	125	六十九銀行が買収
小出銀行	8.12. 9	北魚沼郡小出町	16. 8.24	560	490	六十九銀行と合併
(雷土銀行)	(昭 3. 6. 1)	南魚沼郡東村	28. 1.25	150	131	小出銀行と合併
十日町銀行	9. 4. 1	中魚沼郡十日町	33. 1.22	1,800	1,200	六十九銀行と合併
(水沢銀行)	(昭 2. 4. 1)	中魚沼郡水沢村	14. 7.25	200	200	十日町銀行と合併
神谷銀行	9. 4. 1	三島郡来迎寺村	大 5.10.25	500	250	六十九銀行と合併
栃尾銀行	9.11. 1	古志郡栃尾町	明16. 5. 1	1,000	1,000	六十九銀行と合併
長岡貯蓄銀行	18.12.31	長岡市坂ノ上町	大10.11.10	1,000	250	長岡六十九銀行と合併

注：見附銀行の設立年月日は、広融社の開業年月日
　　資本金は、合併直近期の金額

１．東京栄銀行

東京栄銀行は、明治42年９月、設立、開業した。

同行の設立は、破たんした宮城屋貯蓄銀行の整理と預金者の救済のため、渋沢栄一らが奔走し、預金者を説得、預金を株式に振り替えて新しく銀行を設立したものであった。


東京栄銀行本店

創業以来、預・貸金ともさしたる増減はみられず、経営はやや消極的に推移しており、第１次世界大戦による好景気により一時的な増勢はみられたが、大正９年の反動恐慌以後、預金は減少し、収益も低下した。

その対応策が議論され、長岡銀行と合併、大正11年１月をもって東京栄銀行は解散し、同行本支店は、長岡銀行の支店となった。

２．見附銀行

見附は、江戸時代中期には信濃川に通じる刈谷田川の舟運が開けたこともあり、市場町として栄えた。また、古くから自給用の布木綿を農家の副業として織っており、機屋町としても発展していた。

明治維新後、次第に綿織物から絹綿交織物を主力とするようになり、見附織物は繁栄の様相を強めていた。

明治14年２月、見附新町の坂田藤蔵が呼びかけ、地主、商人および機業家など10人が発起人となり、営業期限を10カ年の23年までとして、広融社を設立、開業した。期限の23年、広融社を解散、見附銀行を設立、翌24年、開業した。

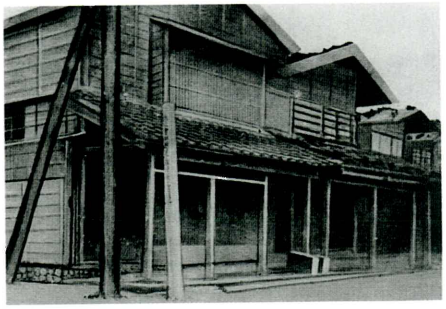
大正９年３月、反動不況が発生すると、当地の機業は苦境に陥り、見附銀行もその余波を受け、滞貸金が増加するとともに、翌10年、行内の不正事件が発覚するなど厳しい局面を迎えた。そして、長年、親密な関係にあった六十九銀行との合併が論議されたが、不調に終わり、急遽、長岡銀行と交渉を進めた。

見附銀行

長岡銀行は、見附地内に支店設置の希望

があったことから、話し合いは急速に進展、11年11月、両行は合併し、長岡銀行見附支店の開設となった。

3．越見銀行


越見銀行

越見銀行は、地元における先発銀行である見附銀行の営業方針に飽きたりない人々により創設され、専務取締役に家坂徳衛、取締役兼支配人に島田桂蔵が就任、明治31年７月、開業した。

同行の営業は、見附銀行の固定客を獲得することに向けられ、機業家および近郷農家を得意先としていた。そして、35年11月には新潟市に創設された積善組合の見附代理店として同組合の貯蓄などの事務を行い業容を拡大し、大正時代に入ると、業績は先発の見附銀行をしのぐ勢いとなった。

しかし、大正７年12月、新潟市の積善組合本部で不正事件が発覚、同行の預金は見附銀行へ急激に流出した。さらに、８年下期には大口貸出先の貸付金が回収不能となり、11年11月には長岡銀行と見附銀行の合併による長岡銀行の支店開設などもあり預金は減少し、業況不振を招いた。

そして、大正12年、同行は、当初、長岡銀行との合併を進めたが、不調に終わり、同年12月、六十九銀行と合併し、越見銀行は六十九銀行見附支店として継承された。

4．脇野町銀行

脇野町村（現三島町）は、水質が優良なうえ、江戸幕府の直轄領（天領）であったため、手軽に認可されたことなどを主因として、古くから酒造業と醤油醸造業が栄えた。そして、製麺業者も多く、また、稲作も盛んで、重要な穀倉地帯であった。

三島農商銀行（明治33年ごろ）

明治28年12月、脇野町村とその近郷の地主、商工業者12人が発起人となり、三島郡内における最初の銀行「株式会社三島農商銀行」を設立、頭取に田口十一郎（三島郡上岩井村 地主）が就任し、営業を開始した。

同行は、経営の健全な酒造業者を主たる貸出先とし、安定した業績を続け、地域産業の発展に貢献してきた。そして、大正９年３月、商号を「株式会社脇野町銀行」と変更した。

脇野町銀行解散記念の茶托
(昭和２年)

しかし、昭和時代に入り、政府および県当局による銀行合同促進政策を踏まえ、経営の堅実なうちに大銀行と合併したほうが地元経済のために望ましいと判断、２年４月、親密な六十九銀行と合併、六十九銀行脇野町支店として継承された。

５．六日町銀行

六日町は、南魚沼郡のほぼ中央に位置し、同郡の行政の中心地であった。

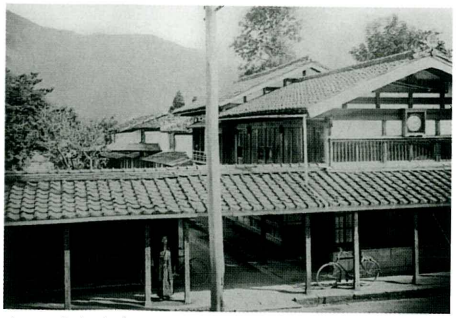
産業は、米を主産とし、明治時代以降は養蚕業地帯としても発展した。

明治29年、青木利福（南魚沼郡中目来田村 地主）、高橋捨松（南魚沼郡六日町村地主）ら南魚沼郡内の地主、商人などの有力者24人が中心となり、六日町銀行の設立を計画、31年２月、設立許可を取得し、同年４月、営業を開始した。

開業当初の資金運用源は、資本金が中心であったが、30年代後半から地元製糸業の発展がみられ、36年５月、同郡大崎村に製糸金融を目的として出張所を開設、同年９月には支店に昇格、規模の拡大を図った。

40年代に入ると、小規模ではあるが本格的な器械製糸工場が数多く設立され、製糸金融もいっそう活発となった。

この状況は、大正時代にも続き、７年11月、県内第一の製糸業地帯である小出に支店を設置し、営業基盤の拡大を図った。しかし、９年３月の反動恐慌以後、製糸資金貸し付けや大戦景気後の株式ブーム時の投機資金貸し付けのほとんどが滞って、同行に大きな打撃を与えた。


六日町銀行本店

渋沢栄一から六日町銀行に贈られた書

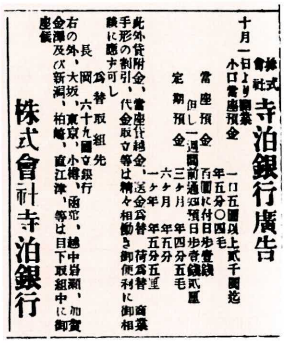
こうして、合併する以外に手段がなく、大蔵省と県当局の合同勧奨もあり、昭和2年10月、親密な関係にあった六十九銀行と合併し、六日町銀行の本支店は、それぞれ六十九銀行の六日町・大崎・小出支店として継承された。

6．寺泊銀行

寺泊の歴史は古く、日本海沿岸航路、佐渡航路の港として栄え、さらに北国街道の宿場町として賑わった。特に江戸時代には、江戸、大坂や蝦夷地などとの交易の要港であり、蒲原米が各地へ大量に回送された。

船絵馬（白山媛神社蔵）

明治維新後、明治20年代後半から、長岡近辺の東山油田の産油量が漸増し、その販路も県内から近県に拡大され、さらに、日清戦争後の企業勃興熱、銀行設立ブームを背景に、当地にも銀行設立の動きが急速に高まった。そして、29年、柳下安兵衛（三島郡寺泊町 地主・醤油醸造業）、五十嵐喜一郎（三島郡寺泊町 地主・酢製造業）、本間健四郎（三島郡寺泊町 回船問屋）ら同町の有力者を中心に近隣町村の地主などを創立者として、29年10月、開業した。


株式會社寺泊銀行廣告
十月一日より開業
小口當座預金
一口五圓以上貳千圓迄
當座預金
定期預金
株式會社寺泊銀行
寺泊銀行の開業広告
（『新潟新聞』明治29年９月30日）

同行の設立時の株主は、地元および近隣町村の住民のほか、県内では、新潟、長岡、直江津など、県外では、東京、函館、釧路、小樽にも及び、寺泊港の賑わいぶりと寺泊銀行に対する期待の大きさがうかがわれた。

開業後は、貸出金が預金をはるかに上回ったが、42年上期、起工された大河津分水工事のための土地代金が多額に預入され、以後、業績は順調に推移した。

さらに、大正年間には、地蔵堂支店を設置したほか洋食器の町へと変貌し発展が期待されていた燕町に地元の要望もあり燕支店を設置し、業容の拡大を図った。その後、地蔵堂銀行との合併に伴い、島崎支店が加わった。

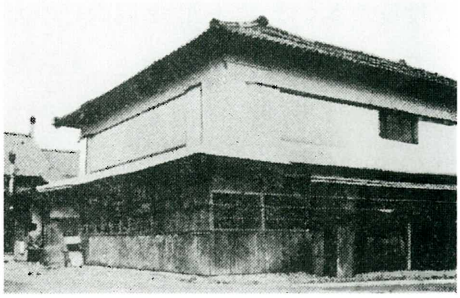
昭和３年、頭取が自己の関連会社の不詳事件に巻き込まれて頭取の職を辞することになった。その後、当局の合併勧奨の強まりもあり、預金者の安全を図り、株主の利益を考え、地域産業の発展に資することが重要であるとして合併を決意、当初、第四銀行と交渉したが、取引先、株主の反対にあって、４年４月、六十九銀行と合

併した。

そして、寺泊銀行の本支店は、それぞれ六十九銀行の寺泊・地蔵堂・燕・島崎支店として継承された。

７．地蔵堂銀行

西蒲原郡地蔵堂町（現分水町）は、信濃川（長岡船道）、西川（蒲原船道）の水運を利用した河岸場町であり、近郷の米の集散地として古くから栄え“越後堂島”と呼ばれるほどであった。


地蔵堂米穀取引所

明治14年３月、解良右一郎（西蒲原郡牧ケ花村 地主）、小川五平（西蒲原郡地蔵堂町 地主）ら11人は、金融会社の設立を計画し、創立事務所を設置、同年７月、地蔵堂銀行の前身である「金融会社」を創業した。預金は僅少で資本金を運用資金源としたが、農村不況が続くなか、21～23年末にかけて、滞貸金が多発するとともに、大株主のなかにも持ち株を手放すものが続出し、所有自社株が資本金の約２分の１にも達し、その整理のため減資を余儀なくされた。

26年12月、株式会社地蔵堂銀行と改称し新発足したが、自己資本の運用に終始し、42年、大河津分水路用地の土地買収代金支払いが行われた際、預金は大幅に増大したが、現金を金庫に死蔵するのみで、経営者は増加する預金に困惑した。

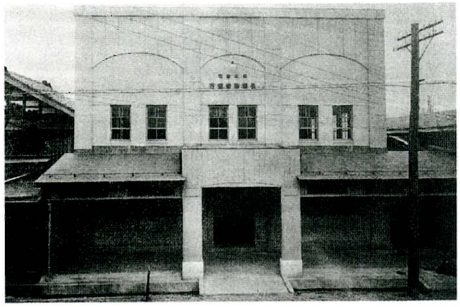
大正時代、鉄道の開通もあり、米穀の集散が急増し、当地の商況は活気を帯びた。

こうしたなか、７年８月、寺泊銀行が地蔵堂支店を開設、これに刺激された地蔵堂銀行は、地元に支店を設置した。その後、島崎、寺泊に支店を設け、業容は次第に拡大していった。

しかし、大正14年１月、専務取締役が急逝した際、同人の小作人名義での総額約20万円にも及ぶ借り入れが発覚し、この不祥事により、大蔵省では、同行に対し寺泊銀行との合併を強く勧奨した。

翌15年１月、地蔵堂銀行は寺泊銀行と合併し、地蔵堂銀行本店は新しく設立された寺泊銀行の地蔵堂支店となり、島崎支店はそのまま存続し、地元の上町支店と寺泊銀行地蔵堂支店は廃止された。

8．長岡商業銀行


長岡商業銀行本店

長岡商業銀行の前身である長岡貯蓄銀行は、大正７年２月に認可を得て、同年３月開業した。

役員の多くは、六十九・長岡両行の大株主で、市内の有力商人、地主であった。

長岡における唯一の専業貯蓄銀行であり、８年12月には長岡市近郊の三島郡における行政の中心地で商業も盛んな与板町、次いで９年８月、古志郡の宮内に支店を設置し、営業基盤の拡大を図った。第１次世界大戦後の好景気の影響もあり、業況は比較的順調に推移した。

しかし、９年３月の反動恐慌後、全国各地に取り付けが発生した。

そこで政府は、貯蓄銀行を零細な資金の安全確実な保管機関として、国民の貯蓄を奨励することを企図した。このため、10年４月、「貯蓄銀行法」を公布、翌11年１月から施行し、これまでの貯蓄銀行条例に比較し厳しいものとするとともに、貯蓄銀行の「一県一行主義」を目指した。

長岡貯蓄銀行は、規制の厳しい貯蓄銀行法のもとでの貯蓄銀行経営よりも普通銀行への転換を選び、10年11月、「長岡商業銀行」に商号変更し、11年１月、普通銀行として再発足した。また、同年11月には、設立当初から役員、株主、資金面を通じて関連の深かった長岡信託㈱（２年６月設立）を合併した。信託会社は、これまでなんら取締法規がなく、弱小資本のものが多かったため、11年４月、「信託業法」が公布（12年１月施行）され、最低資本金を100万円とするなど規制が強化された。同信託は増資も困難なことから存続を断念し、長岡商業銀行との合併に踏み切った。

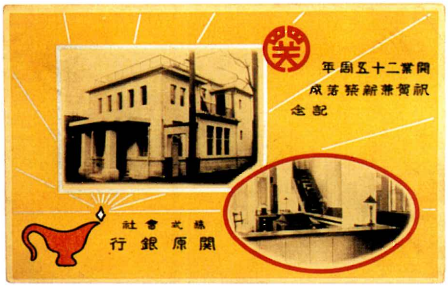
その後、同行は、ほぼ順調な発展を続けたが、昭和に入ると銀行合同の波にさらされ、４年４月、これまで株主、役員面などから結び付きが深かった六十九銀行と合併し、同行本支店は、六十九銀行の表町・与板・宮内支店として継承された。

9．関原銀行

関原という名前の由来については、寛文２年（1662）、柏崎村枇杷縞（現柏崎市）の関矢清左衛門がこの地を開墾したと伝えられるところから「関矢の原」が「関原」

になったといわれている。その後、長岡－柏崎街道の中間に位置することもあり、宿場町として繁栄した。

当地の主な産業としては、葉煙草栽培、毛筆製造、醸造があげられるが、特に葉煙草の栽培が盛んであった。



関原銀行の開業25周年祝賀兼新築落成記念絵はがき

明治27～28年の日清戦争後、政府は増税の必要から、29年に「葉煙草専売法」を制定（31年１月施行）、その施行に先立って葉煙草専売所が関原村に設置された。そして、葉煙草買い上げ代金支払いなどの代理業務と、民間煙草製造業者に対する金融のため、関原村の地主近藤勘太郎らを中心として銀行設立の気運が高まった。

こうして、31年９月、関原銀行が設立され、翌32年１月、開業した。

開業後は、堅実経営に徹し、順調な業績を続け、設立から合併までの30年以上にわたって一度も増資を行わず、全国的にも珍しい事例であった。

優良な資産内容と堅実経営を誇った同行も、昭和３年１月の銀行法施行により、単独増資による存続の道もわずかに残されていたが、趨勢として合同せざるをえない情勢であった。こうして、６年12月、関原銀行は、設立当初から役員、資金などの面で関係の深かった六十九銀行へ営業譲渡し、解散した。

なお、六十九銀行が合併ではなく買収の形式をとったのは、当時の経済・金融情勢を反映して県内他行と同様に、同行も利益の減少とともに払込資本金利益率が低下傾向にあり、合併による配当負担の過重を避けるためであったと思われる。

契約に従い、六十九銀行は、関原銀行所在地に関原支店を設置した。

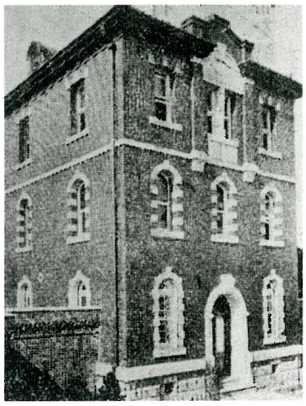
10. 今井銀行

西蒲原郡吉田は、慶安２年(1649)、長岡藩の藩領となり、同地の大地主今井家は、長岡藩領西蒲原地方の藩米の売却を一手に賄うなど、長岡藩との関係は深いものであった。

今井家10代孫市は、例年、信濃川の大洪水で難渋している自家の小作人と出入りの大工・職人の惨状を見るに忍びず、全員に貯金を行わせる今井家貯蓄組合を作ることを明治32年に計画し、34年から実施した。

また、33年２月、折からの銀行設立ブームにより、合資会社今井銀行を設立した。

同行は、役員の全員が今井家一族によって占められ、出資金も88%を今井宗家当主が所有しており、今井家の機関銀行であった。


今井銀行

設立後は、堅実な貸出方針を貫いて、手堅い経営態度を維持した。そして、時勢の進展に伴う資金需要の増大に対応して、大正５年７月、株式会社今井銀行を設立、翌６年１月、合資会社今井銀行の営業を継承して新発足した。改組後、第１次世界大戦の好況を反映して、業容は飛躍的な発展を遂げたが、その後、反動不況に直面しても、常に堅実経営に徹した。

今井銀行の行名入り茶托

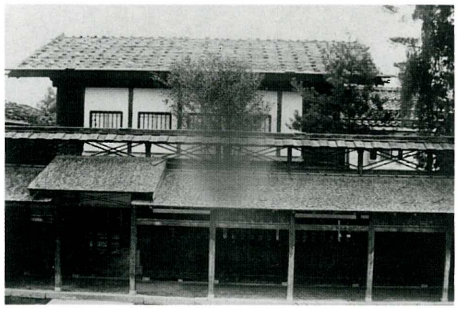
そして、昭和４年、当地方では、西吉田、巻、和納の３行が第四銀行、寺泊銀行は六十九銀行に合併し、今井銀行は、唯一の本店銀行となり、大銀行の支店と競合するところとなった。

今井銀行は、銀行法による最低資本金を有し存続可能であったが、時代の趨勢から、友好関係にあった六十九銀行との合併を決意した。そこで、７年１月、六十九銀行は今井銀行の業務を買収により継承し、六十九銀行の吉田支店を開設した。

11. 小出銀行

小出町は、魚野川と破間（あぶるま）川の合流点にある谷口集落で、広い商圏を持ち、北魚沼郡における商業の中心地であった。また、産業は、米を主産とし、養蚕・製糸・材木業が盛んで、早くから製糸業が発達、県内第一の製糸業地帯となっていた。

明治15年11月、小出の伊倉長三（地主・書籍商）を中心に同地方の地主、商人ら有力者11人が設立発起人となり、小出銀行の前身である「責任無限小出金融社」を創立、翌16年４月、営業を開始した。なお、伊倉は、当時、北魚沼郡長であった関矢孫左衛門（第六十九国立銀行初代頭取）と相談し、その指導を受けながら設立に奔走したといわれている。


小出銀行本店（明治34年９月新築）

小出金融社は、製糸金融を主要業務としており、農村経済の窮乏により、同社の業

績も不振をきわめ、23年には資本金を５万円から４万円に減資し、負担を軽減して経営を維持した。そして、26年７月の銀行条例施行に伴い、同年12月、普通銀行に転換して株式会社小出銀行に改組、その後、増資を繰り返し、業容の充実を図ったが、40年以降は、慢性的な不況により、地元製糸業とともに低迷を続けた。

小出銀行の創立25周年記念木杯

大正８年の株式・商品市場の投機ブームにより景気は上昇し、同年10月には堀之内支店を開設、営業基盤を拡大した。しかし、こうした好況も短期間で終わり、９年の反動恐慌後は再び不況に見舞われ、役員や地元有力者に対する大口の株式購入資金や製糸業者に対する多額の固定貸しが発生、追い貸しをしなければならない事態にもなり滞貸金が増加、他町村の貸金業者から借り入れの必要をも生じさせ、支払利息が増大し収益を圧迫していった。

そして、昭和２年の金融恐慌以後、県内中小銀行の合同が相次ぎ、３年６月、小出銀行は継続が困難な状態にあった南魚沼郡の雷土銀行を合併した。雷土銀行の本支店は、小出銀行雷土支店および浦佐支店として継承されたが、７年７月、雷土支

歴史の散歩道⑮

小出金融社と後身小出銀行への第六十九国立銀行の協力

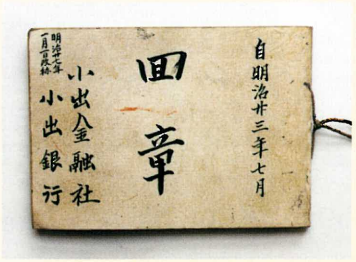
明治15年11月15日、資本金５万円をもって設立された小出金融社は、主として役員が出資する資本金を貸し付ける小規模な貸金会社で、明治前期の銀行類似会社として典型的なものであり、当該地域の庶民金融として当時は大事な金融機関であった。

小出地域を中心とする北魚沼郡地方の繭（けん）糸（し）製糸事業への貸し出しを主要業務としたほか、小出嶋村を始めとする近隣村々の戸長役場への貸し付けなどにも関係した。

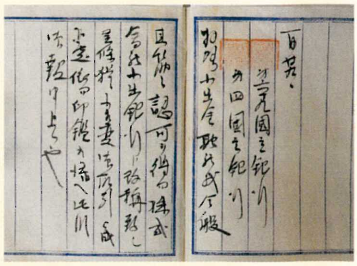
小出地域の製糸金融は、夏が繭糸売買の大事な季節であったことから、４月上旬から10月中旬にかけて資金需要が増加した。ことに６月から９月にかけて借り入れ要請が集中したため、その時季には必要資金の多くを他金融機関からの調達に頼らざるをえなかった。

当初、こうした資金は、小千谷や堀之内など近郊の金融機関からの借り入れで賄っていた。

その後、第六十九国立銀行など都市部の銀行からも巨額の借り入れをするようになり、明治21年以降、毎年、第六十九国立銀行へ多額な資金借り入れ申し込みを行っている。



小出金融社から小出銀行への転換の時期にかけての『回章』



「小出銀行」と改称の時期の『書翰留』の記事

店は廃止された。その後も、銀行合同は進められ、８年に北魚沼郡内で独立しているのは、小出銀行だけとなった。同年12月、政府および県当局による銀行合同勧奨に従い、従来から金融、為替取引や株主として関係の深かった六十九銀行と合併した。小出銀行本店には、従来からあった六十九銀行小出支店が移転し、二つの支店は浦佐・堀之内支店として継承された。

12. 雷土銀行

明治23年12月、南魚沼郡塩沢村（現塩沢町）の銀行類似会社「栄盛会社」が解散、同社の株主であった南魚沼郡三用村大字雷土の地主上村清治、佐藤梅太郎、上村宇伝治、佐藤玉太郎の４人は、その解散払戻金を基金として頼母子講の「共積講」を組織した。

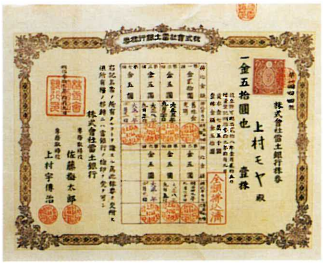
26年７月の銀行条例施行に伴い、同講を銀行として発展させることにし、28年１月、小出銀行から事務的な指導を受け、南魚沼郡では最初の銀行として株式会社雷土銀行を設立、同年３月、営業を開始した。

同行は、設立当初、自己資本を貸付金にあてるという頼母子講的な性格が強かったが、30年代、蚕糸業の急速な発展により製糸金融を行うようになり、業容も次第に拡大した。しかし、40年代には、蚕糸業を始め地元農村の不況の影響を受け、業績は停滞した。

大正時代を迎え、５年ごろから景気は回復し地元農村経済は非常に潤い、この好況を背景として、８年８月、南魚沼郡有数の商業地として栄えていた浦佐村に支店を設置した。しかし、９年の反動恐慌以後、地元および浦佐の経済は停滞し、滞貸金が増加、債権保全のため追い貸しの必要が生じるなど、経営は悪化した。

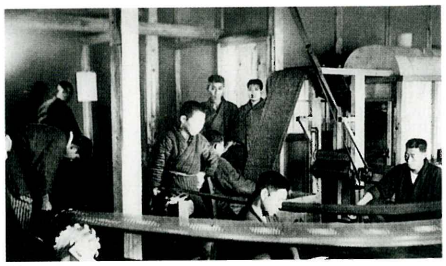
こうして、昭和３年、親密な小出銀行と合併し、雷土銀行本支店は、それぞれ小出銀行雷土支店および浦佐支店として継承された。

雷土銀行本店（明治37年ごろ）

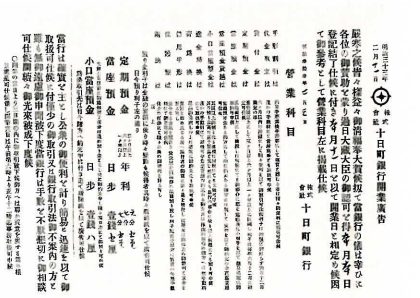


雷土銀行の株券

13. 十日町銀行



はた
機の仕上げ（明治末期）



十日町銀行の開業広告

豪雪地で知られる中魚沼郡十日町（現十日町市）は、古くは麻布の主要産地であったが、明治維新後、絹織物の生産地へと大きく転換していった。明治20年代を迎えると、染色技術の改良、新機械の導入および撚糸技術の進歩に伴い、絹織物産地としての基盤を固め、急速に西陣、桐生、丹後などの先進地との差を縮めていった。

こうしたなか、明治31年、県知事、郡長の強い勧奨により蕪木八郎右衛門ら地元織物買継商の有力者を中心に銀行設立の気運が盛り上がり、33年１月、十日町銀行を設立、翌２月に開業した。

開業早々の６月、十日町大火により、十日町銀行も類焼するという苦難に遭遇した。しかし、44年７月、郡内随一の輸出向け羽二重の産地で機業家も多い千手町村（現中魚沼郡川西町）に出張所を設置、その後、支店に昇格するなど、積極的な営業政策を推進し、明治時代の業績は順調な伸展をみせた。

大正時代を迎え、第１次世界大戦の好影響を受け、預・貸金とも著増し、７年５月、中魚沼郡下船渡村に大割野出張所を開設、９年８月、新築移転し、支店に昇格した。しかし、９年の反動恐慌後は、慢性的な不況により、貸出金の漸増傾向と預金の伸び悩みが続いた。

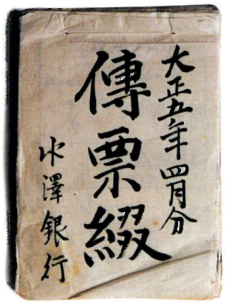
そして、昭和２年４月、これまで密接な関係にあった水沢銀行を、当局の強い勧奨もあって吸収し、十日町銀行水沢支店とした。しかし、六十九銀行と第四銀行も、２年から８年にかけて、北魚沼・南魚沼両郡の諸銀行を合併し、十日町銀行は同地方唯一の本店銀行となり、不利を免れなかった。このため、大資本による銀行経営の必然性を認め、設立以来、親密な関係にあった六十九銀行との合併交渉が進められ、９年４月、実現した。十日町銀行の本支店は、水沢支店を除き六十九銀行の支店として継承され、本店は六十九銀行十日町支店、支店はそれぞれ千手支店、大割野支店となった。

14. 水沢銀行

水沢銀行

中魚沼郡馬場村の中心街であった水沢村落（現十日町市水沢）は、旧善光寺街道に面して、津南方面はもとより東頸城郡、信州方面との物資交流の拠点として栄え、中魚沼郡内では、十日町に次いで商業の盛んなところであった。

明治14年７月、銀行類似会社の設立ブームが続くなか、地元の地主富井邦彦、丸山久孝、金沢新清の３人が発起人となり、水沢銀行の前身である「進益社」を設立した。



水沢銀行の伝票綴

26年の銀行条例施行に伴い、同年11月、株式会社進益社に改組、次いで、32年９月、社名を株式会社水沢銀行と改称した。資本金で貸出金を賄う貸金会社的な性格が続き、大正９年の反動恐慌後は、不況が慢性化するなかで次第に資金が固定し、経営が徐々に苦しさを増していった。

大正12～13年ごろから、十日町銀行との合併の内談があり、昭和２年４月に実現、水沢銀行の本店は、合併後、十日町銀行水沢支店として存続した。

15. 神谷銀行

三島郡来迎寺村（現越路町）は、越後平野の南端に位置し、魚沼地方に通じる交通の要衝で、舟運、鉄道による物資の集散地として栄えた。

明治29年、来迎寺村を経由する北越鉄道（現信越線）の工事が始まり、土木工事の労働需要が急増し、その賃金収入が農家を潤した。しかし、当時、この地方では、一般的に貯蓄思想に乏しく、金融機関もなかったため、奢侈の風潮に流れていた。

そこで、三島郡の大地主で、衆議院議員、六十九銀行取締役などの要職を経験した高橋九郎は、こうした様子を黙視することができず、明治37年３月、施行後、日も浅い産業組合法による神谷信用組合を創設して、自ら組合長となった。

設立当初は、信用組合の性質を農民から理解してもらえず、組合員の加入勧誘に困難を生じる状態であった。このため、高橋は、趣旨の普及に努め、無報酬で経営

神谷銀行

贈答品の巾着

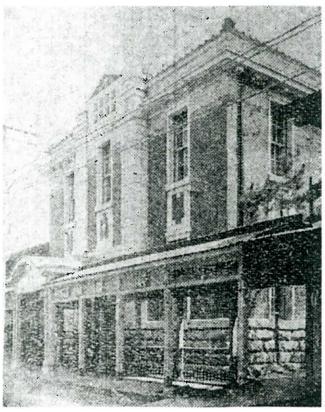
にあたり、また、私財を組合に預金し、金融を円滑にして組合員の利便を図るなどの努力を続けた。この結果、業容は拡大し、その機関となるべき銀行がなくては十分な活動を展開することが困難となり、大正５年10月、神谷銀行を創立、翌６年２月、営業を開始した。

同行は、高橋家の銀行としての性格が強く、資本金は全額高橋家の出資であった。業容は、第１次世界大戦による好況に支えられて順調に拡大したが、その後の反動恐慌と関東大震災による影響は大きく、滞貸金が著増し、12年下期には総貸出金の約10％にあたる６万円の償却を行い経営の立て直しを図った。さらに、昭和６年の上越線全通は、地元経済に交通の要衝としての役割を失わせ、農村の深刻な不況もあり、厳しい業績を余儀なくされた。

また、三島郡内の本店銀行は同行のみとなり、将来を展望して、親密な関係にあった六十九銀行と９年４月に合併し、六十九銀行来迎寺支店として継承された。

16. 栃尾銀行

栃尾は、室町時代、栃尾城の山城城下町として発達し、元和６年（1620）に長岡藩の藩領となり、栃尾郷の商業の中心地となった。


栃尾銀行

また、古くから養蚕と機業が盛んで、栃尾紬の産地として全国にその名を知られていたが、さらに明治９年には、米沢から職工を招いて節織を開発し、紬織とともに栃尾織物の主要製品となった。明治13年10月、栃尾郷東谷村小向の県会議員川上喜右衛門ら地元および近郷の有志の要請により第六十九国立銀行栃尾出張所が開設されたが、15年、国立銀行の出張所整理の通達が公布され、同年12月限りで栃尾出張所は閉鎖され

た。

閉鎖にあたり、第六十九国立銀行および栃尾郷の双方の関係者が協議し、新たに金融会社「栃尾誠信社」を設立、16年２月、旧第六十九国立銀行栃尾出張所の事務所跡に開業、１月１日にさかのぼってその業務を継承し、26年、銀行条例の施行に伴い、栃尾銀行と改称した。

38年４月、長岡銀行が栃尾出張所を開設、以後、支店に昇格した同行栃尾支店に次第に経営基盤を侵されていった。大正15年７月、栃尾地方は大水害にあい、その後は不況も深刻化し、機業の不振が続き、大口貸出先にも不良貸し出しが発生した。このため、配当率も低下せざるをえなかった。

大正15年７月の大洪水

昭和９年春、六十九銀行との合併交渉が進められ、同年11月、両行は合併し、六十九銀行栃尾支店の開設となった。

17. 長岡貯蓄銀行

大正10年４月の「貯蓄銀行法」制定当時、長岡市においては、前述した専業貯蓄銀行の長岡貯蓄銀行（10年11月10日長岡商業銀行に商号変更）と貯蓄銀行業務兼営の六十九・長岡両普通銀行が貯蓄預金を取り扱っていた。各行は、翌11年１月からの貯蓄銀行法施行を前に、それぞれ対応策を検討し協議を重ねた。そして、10年７月に県庁で行われた貯蓄銀行合同に関する委員会における「貯蓄銀行及び兼営銀行業者は新潟、長岡、高田の三市に於て新たに各一個の貯蓄銀行を設立する」との決議もあり、長岡市に３行出資の貯蓄銀行を新設することで合意した。

10年11月に認可を得て、新貯蓄銀行への貯金引き継ぎ高が最大であった長岡銀行が主体となり、12月に長岡市表町において長岡貯蓄銀行として開業した。

同行は、その母体３行からの貯金を引き継ぐとともに、３行の本支店および各地の銀行を代理店として積極的な営業を展開した。選考を童謡作家として著名な野口雨情に依頼し、貯蓄童謡懸賞募集を行うなど時宜を得た営業施策を実施し、業況は順調に推移した。

そして、14年９月に殿町支店を設置し、15年12月には本店を長岡市坂ノ上町（昭和16年10月１日大手通に町名変更、現当行本店所在地）に新築移転し、従来の本店

は表町派出所として同日開店、７カ月後の昭和２年７月、支店に昇格させた。その後、16年12月、加茂出張所を設け、営業網の拡大を図り、開業以来順調なあゆみを続けた。

長岡貯蓄銀行本店（大正15年新築）

しかし、18年３月、「普通銀行等の貯蓄銀行業務または信託業務の兼営に関する法律」が公布（同年５月施行）され、普通銀行の貯蓄銀行業務への進出がほとんど無条件に認められた。このため、同行が単独で存続する意義を失い、18年12月、長岡六十九銀行と合併し、長岡貯蓄銀行の本支店、出張所は、そのまま長岡六十九銀行の大手支店、殿町支店、表町支店、加茂出張所として引き継がれた。

野口雨情選『童謡集　雪、貯金』と、大正ロマンの長岡貯蓄銀行

設立間もない長岡貯蓄銀行が大正13年の年末から14年１月半ばにかけて行った貯蓄童謡懸賞募集は、「勤倹貯蓄の必要な事を鼓吹したい微意」から、小学生の児童たちに貯金をする習慣を作り、貯金の楽しみを植え付けたい、という趣旨によるものであった。

募集した題は、「雪」と「貯金」の２題であったが、応募数は合計で2,696編の多数にのぼり、市内を始め中越各地の小学生による応募があった。

応募作品については、まず、俵谷瞽笛らの地元選者が選考し、童謡作家として売り出し中の野口雨情が最終選考をした。雨情は、当時２歳の娘の病死を悲しみを込めて詩ったといわれる『しゃぼん玉とんだ』などの童謡で知られ、全国を巡って童謡や民謡の普及に努めていた。

「貯金」の題の１等は、阪之上小学校尋常科３年堀井四郎の次の作品であった。

「大こくさまの　おこづちは　何でも
すきな　ものがでる　みなさんほしい
人々は　むだのお金を　銀行へ
あづけてごらん　銀行は
大こくさまの　おこづちを
だれにもくれる　ところです　」

入選した作品は、すべて同行が編集した『野口雨情先生選　童謡集　雪、貯金』と題する小冊子にまとめて収載され、大正14年３月、発行された。

こうした積極策の展開による業容の拡大に伴い、同行は、翌15年、本店を、市役所（現大和長岡店の位置）とは道を挟んだ東側の一角（現当行本店の位置）に新築移転した。

当時、県道停車場通りと呼ばれた今の大手通りは、大正10年から３年間の継続事業で県の改修整備工事が行われた。大正13年の夏には城下町特有のかぎ形に折れ曲がった道路を拡幅して直線にし、歩道と車道を分離した、当時としては模範的な道路として生まれ変わり、まさに長岡市のメインストリートとしてその姿を一新した。さらに、昭和２年に福助足袋が街路端に鈴蘭電燈を寄付してからは一段と都市的美観を加え、大正ロマン漂う町並みにいっそうの風情を添えた。

このころから、停車場通りはもと長岡城の大手筋に当たるということから「大手通り」の通称で呼ばれるようになった。

明治44年に建てられた、バルコニーと列柱を配した正面部分を特徴とする長岡病院の木造の建物と対比して、斜め向かいの鉄筋コンクリート造り３階建て、化粧タイル仕上げの四角い、“長岡貯蓄”の建物は、大手通りの町並みにいっそう近代的な雰囲気をかもし出した。

当時を知る市民には、隣の市役所屋上のサイレン塔とともに郷愁を呼び起こす風景であった。

『童謡集　雪、貯金』

昭和３年の大手通りの風景と長岡貯蓄銀行本店